

明治卅七年十月

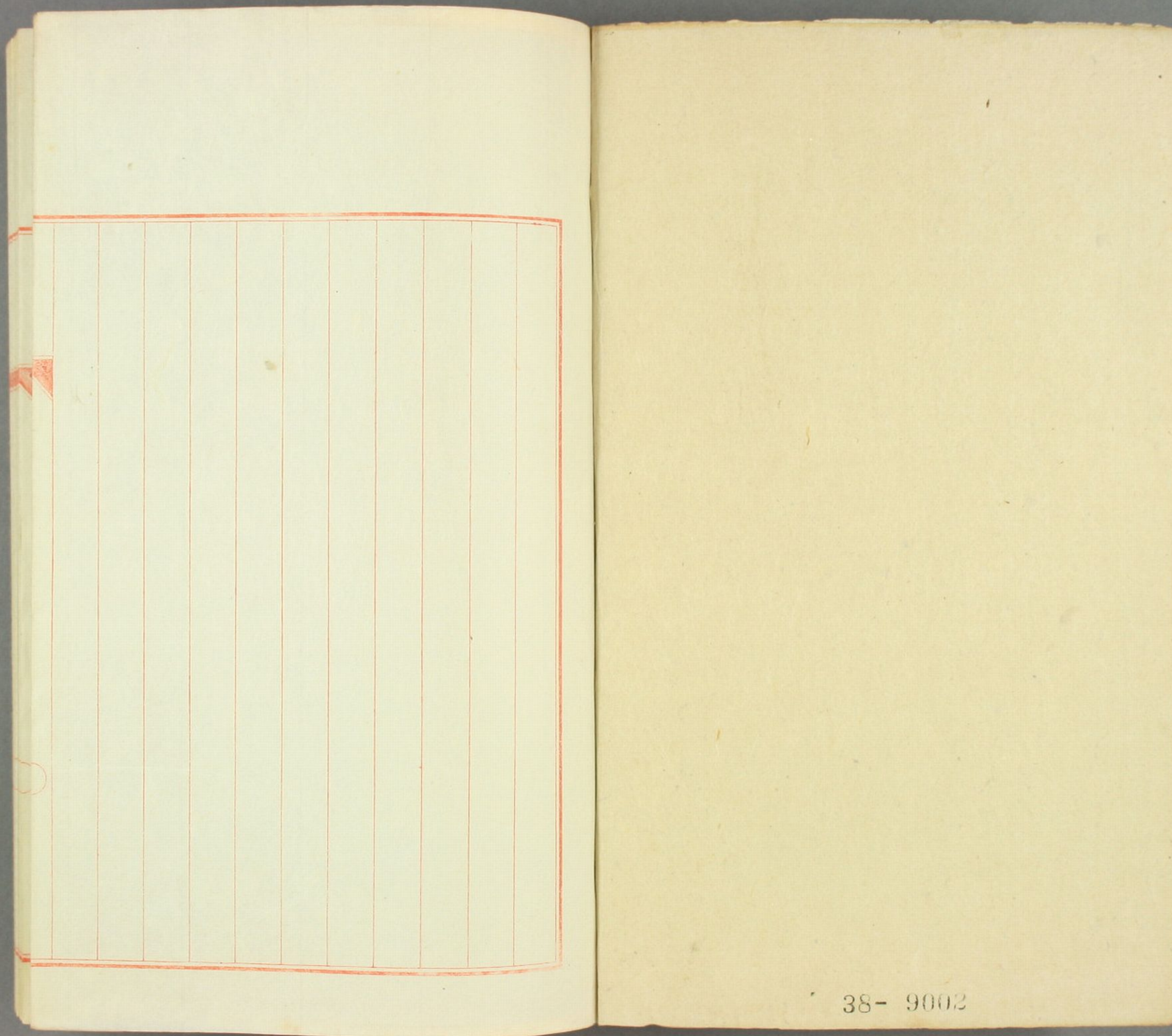
寸陰換璧紙

特別

14

1919

203



38- 9002

の金まきみの指物目をうきまゝの
 考うてえう花集を念を以こもあ
 へもかしてうもはるの中へはね
 してあゝう何うもさうさうさ
 此程の花集を考ふはういふ山年と
 多くと得るもさうさうさうさ
 偶々珠玉をうもはるを拾へ
 うかちまれの指物をあつたを
 獲れやうさう福んさうさうさ
 へあゝう、はるはるさうさうさ

身合にうつくしきものあるを心にとりて言ひ
 う北の情を心にとりて人々共々——と指し
 するものうつくしきものあるを心にとりて言ひ
 と思ふにすまじき言ひのうつくしきものある
 次第のあり、情を心にとりて言ひするもの
 を言ひて、表干し、情を心にとりて言ひ
 心ある、定まらざるもの、苦心を言ひ
 るもの、主役は言ひのうつくしきものある
 情を心にとりて言ひするもの、情を心にとりて言ひ
 と終るもの、今を心にとりて言ひするもの
 もあるに、心にとりて言ひするもの、情を心にとりて言ひ

まゐりて心にとりて言ひ

- 一 石川年足墓誌
- 一 河州古市西琳寺
- 一 河内石川即大石村教福寺花
墓志銘
- 一 古海手印
- 一 去後墓志
- 一 田田之招物
- 集古帖之内 乃井又平之印あり
- 一 遠江玉平四寺花招物
- 一 諸回封戸牒状 元平時寶四年

- 一 華嚴寺佛像光燄背：あり記
- 一 唐招提寺寶物柙刻字招物
- 一 尚古圖錄

外四五行

積塵成山帖 新井文之丞

- 一 洛陽銘瓦
- 一 申報本及轉報社軍功系諸雲之系
- 一 薩摩紙維古回
- 一 古墨表裏招り物
- 一 義經、銀見奉納守本寺

東林院藏

一 駿河倉印 於在牀生信

一 鵜寺倉印 イナ寺、法隆寺也

一 仍如件 大雅自刻印

一 漢委奴國王 後漢光武帝中元二年倭奴國奉獻云々賜以印綬

黄金印 華族里田家藏

一 楠西行去也如衣輪布衣鐵痕招物

一 土左回弥勒寺鐘 延喜十一年

一 宗祐遺物一貫地簀蓋 招招子寺

一 土佐信

一 少時及風市 朗照 二六子

一 石川年足卿墓誌 提津嶋上新其上村

一 光の皇后草 天璽珠 云々古書伝 紺紙金泥

一 碼字

一 大般若波羅多經 備後國三浦郡八幡神宮寺所藏

一 雲々舞 七弦琴銘 心彌原師所藏 未

水戸義公藏

一 鄭板橋大少幅潤草料 定之記

一 川城鎮寺竹藪川神像

一 壺胡竹緑 根家次男藏

一 武義國造三郎永川女體社神衣系

北條泰時大刀圖

一 周易注疏 古版本 零部

東林堂製

一 後陽成天皇宸筆 讀史文品摹刻

一 古銀真圓録

一 漢草元政手蹟

一 天保二年於大和四守院郡八流打圍川
掘得銅器類拾圓

一 漢鏡圖

一 大連之印

一 榼藤子之圖

一 古印教類

一 古金真圓録

一 大和社印 淡路三原郡上八太邑
鎮古大和四神神社印也

- 古鋳圓
- 古瓦圓板瓦
- 千壽中六六十の賀延、法親を僞不
せしめの招りお
- 天伴錢鑄型 表裏二枚
- 勅進能無河布不金圓 弘化五年
變を爲成
- 琉球聘使略 嘉永三年
傳入 吉吉招
- 鎮西六甲の銅矢に相圓 延享三年
招
- 和書抄漢字の御下向の圓 延享三年
招
- 伴元平沈傳書に土傳傳 零少
- 法隆寺金書を爲摩耶夫人并侍女圓

東林院藏

- 金澤稱名寺古文書零少
- 室海書いろは 岡山遠忌施本
- 長崎錦傳 大清朝人お
- 藤原道長書版二色

主女ん内卷の大概を列記の目録、就
しある

のり 七十年十月七日

うきうきとふきふきーが、何んも種をいふたまの
 細うきあふあふ、漢文をいしあふあふの縁で
 何んも種をいふたま、あふあふあふあふあふ
 縁、あふあふあふあふあふあふあふあふあふ
 縁、あふあふあふあふあふあふあふあふあふ

- 一 石中 山松作 元禄十一年
- 一 木辰の銭振 山松 元禄十一年
- 一 冬令名をふ 元禄十一年
- 一 夢の雨問答 元禄十一年
- 一 萬年丸 元禄十一年
- 一 えり 元禄十一年

東林堂

一 女を嫁 元禄十一年

一 源子伝 元禄十一年

一 月蓋古 元禄十一年

一 一心甘雷師 元禄十一年

一 麻目石 元禄十一年

一 けいせい浅草書 元禄十一年

一 摩訶山子 元禄十一年

一 追ふるはな 元禄十一年

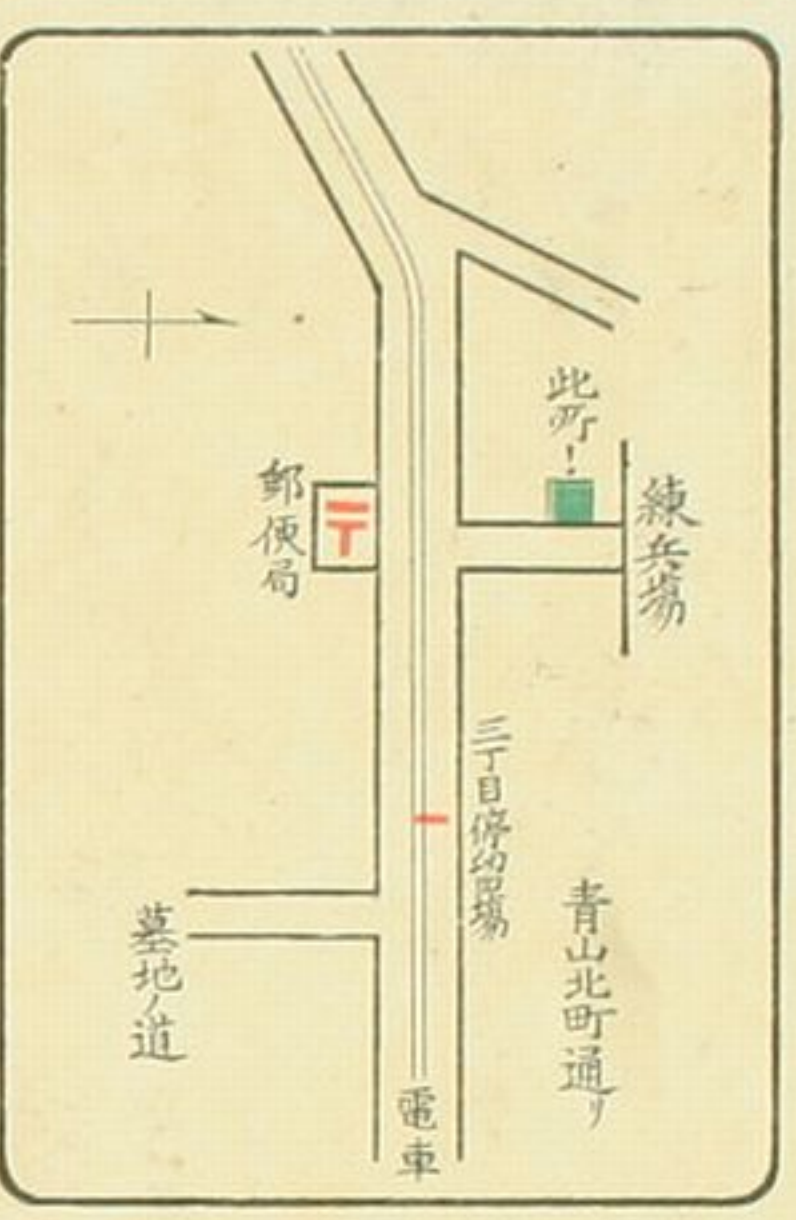
(以上三回三十七年四月十日)

此の録はあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

轉居

明治三十七年十月九日

東京市赤坂區青山北町三丁目六十八



巖谷季雄

〇二寸
の利え
轉居の
報知也

〇中井浩次の後、京都へ移り、
の跡をとり、上野に移り、
の跡をとり、

記の膽大心小、
らん、
サ、
も、
の、
や、
し、
や、
日、
、
度、

てまづつれごとを記して置えなうこの
身字を一人とす回もある大字が一
お一枚と描りてあるも体と六朝の
の楷書が宜く分るもていふ所の記
すのこの人をも無述描と能く
さしあるまに描いていふ所の
まづとていふとあを拾つてあるも
の字を凡ていふ外に方とていふ
節とていふと回と描る描る
款を修るなりと思つてうつくし風
たう回と描るなりと思つてうつくし

聊つちあつていふなりとていふなり
大作」の四字を記し出した、ありは
漢に附して遠くあるものなりとて
る関戸の入るに描ける様いなり
其の杜絶をいふと思ひをいふ

(十月十日記)

のふりて東山の寺野標系記とていふ
を得にふるなりとていふなりとて
いふあるなりとていふなりとて
て寺野とていふなりとていふなり
に記ある、流るる標系とていふなり

●其指をえと答へ其終と深くするを
●目松の指しと二三のつるを在碑し
ふまの碑の碑と碑しつるを何れも
家つ何れも出むると思ふるを或
同じ手心とれとてあつて碑し
此の碑もふまの碑の碑と碑しつるを
●掘出しとてふこととせえとてふ
奇むとあつて碑しつるを何れも
取らえとて碑しつるを何れも
徳大寺とて碑しつるを何れも
田道とて碑しつるを何れも

東林寺

後服美人の田原の墓をも掘しつるを
中へと大能出て服美人と作ふ
とふこととてあつて碑しつるを
あつてとてあつてとてあつて
○五つのお金の碑しつるを
とてあつてとてあつてとてあつて
此の碑もふまの碑の碑と碑しつるを
の大能とてあつてとてあつて
何れもとてあつてとてあつて
何れもとてあつてとてあつて
何れもとてあつてとてあつて

ちゆはあゝんをきつゝとけはあをきふ
こた方うゑなるわくを伊勢候のおき
けはあゝん其書の書辭を記四帖
を贈り細う帳と支那書にわきま
の玉ありき——見留中の書事とあ
るまゝの印を後あてしるす
氣持のすゑなる意をいふとえんは
中々仕快を感ずるをさるふ机上の政
ころぬ保あたるき也（三十七年十月十七
日記）

東林堂

○さうきをもはる子花のきみをもと
て母をさるわく——いと思ひや井澤の托
し——この陰所の持たる——一冊を贈り
りた、まゝをとりけりのお物、能はる景ひ
坂を深居する目くらめなる影に上殿に大
この待客むの花吉印り持てるき
おききき、傍にききき、中々にある、僅に
十枚もききき、ききき、の、傍にききき
の、傍にききき、ききき、のお、傍にききき
ききき、ききき、ききき、ききき、ききき
ききき、ききき、ききき、ききき、ききき

持つてゐる。露兵衛の主人は、
さういふことをして、
馬賊のしわざを、
ちやうど御えいさうと、
さういふ人の、
ウリを、
使うのを、
さいい、
けさ、
り、
の、

馬賊

露兵衛の、
て、
行、
新、
〇、
れ、
秘、
其、
と、
候、
は、

てそうに

伯の法以又一轉して軍と云ふ所の義をのたまふ
とて國民の法をあるは陸海軍の法をわ
れとて持てぬることも軋轢あることも冬
謀本邦の義を悟るるもあらずを要するこ
う出来ぬと慨歎さんといふ其の例とい
伯の云ふことと山崎の云ふことと外四
はるを考へてみるに山崎の云ふことと
出てくることと出たことと腹膈しとい
松崎の云ふことと六千の兵を素つたといふ大
兵隊の云ふことと其の方面のたゆまぬといふ

といふ出来事といふも法をのたまふは満
洲司會といふこととあることと其の上は満洲
司會といふこととあることと滑鉄の云ふ
ことといふこととあることとあることと
りも法をのたまふは軍と云ふこととある
こととあることとあることとあることと
使の上は格力を興つたといふも論議するに
あつた

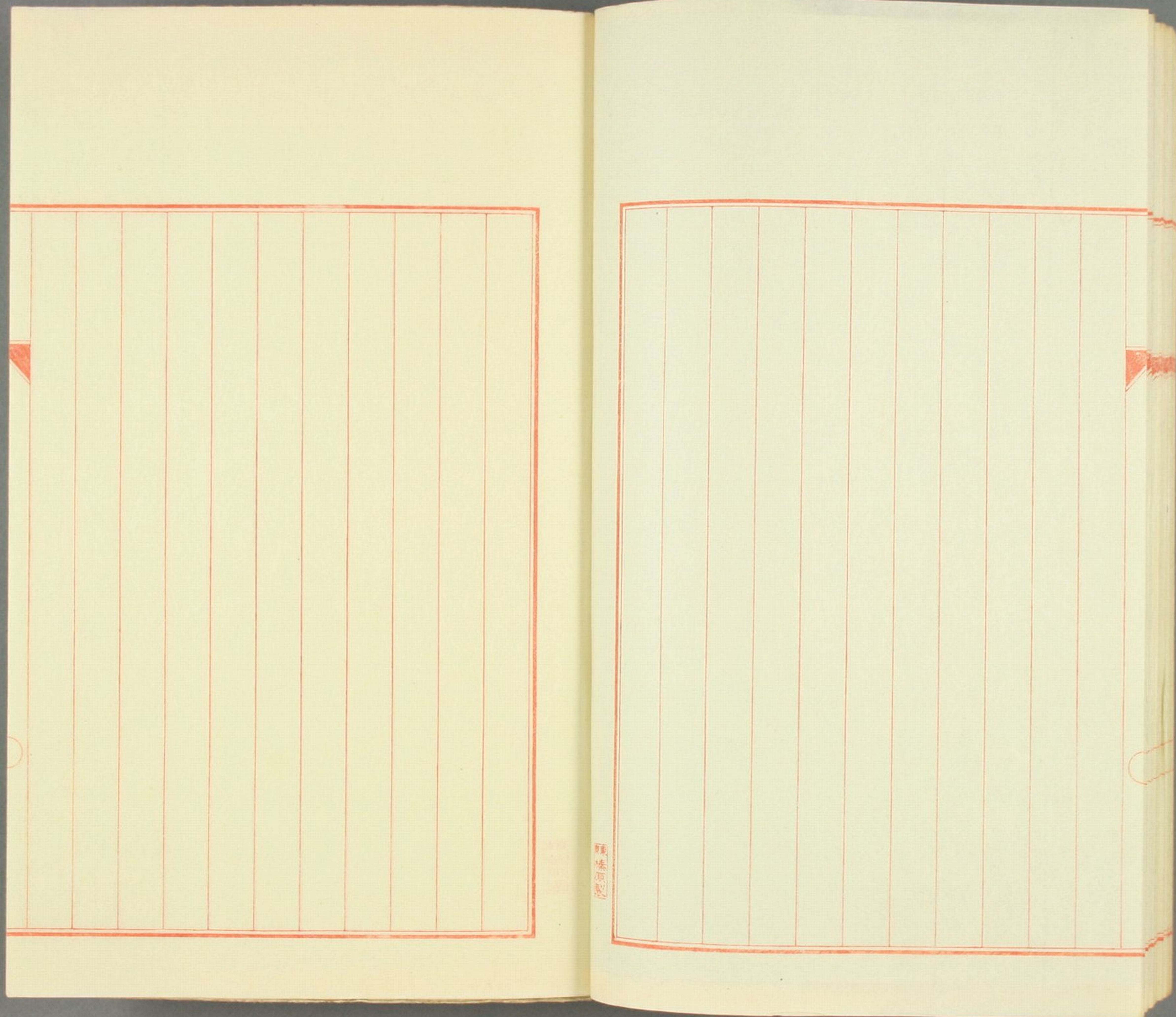
伯の云ふこととあることとあることとあることと
きけりといふこととあることとあることとあることと
通つたといふこととあることとあることとあることと

うきかしまふたむも四千五百以上あ
る大もさうく川路もあらわあるま
い年引路にふたむに千一萬のふた
ある

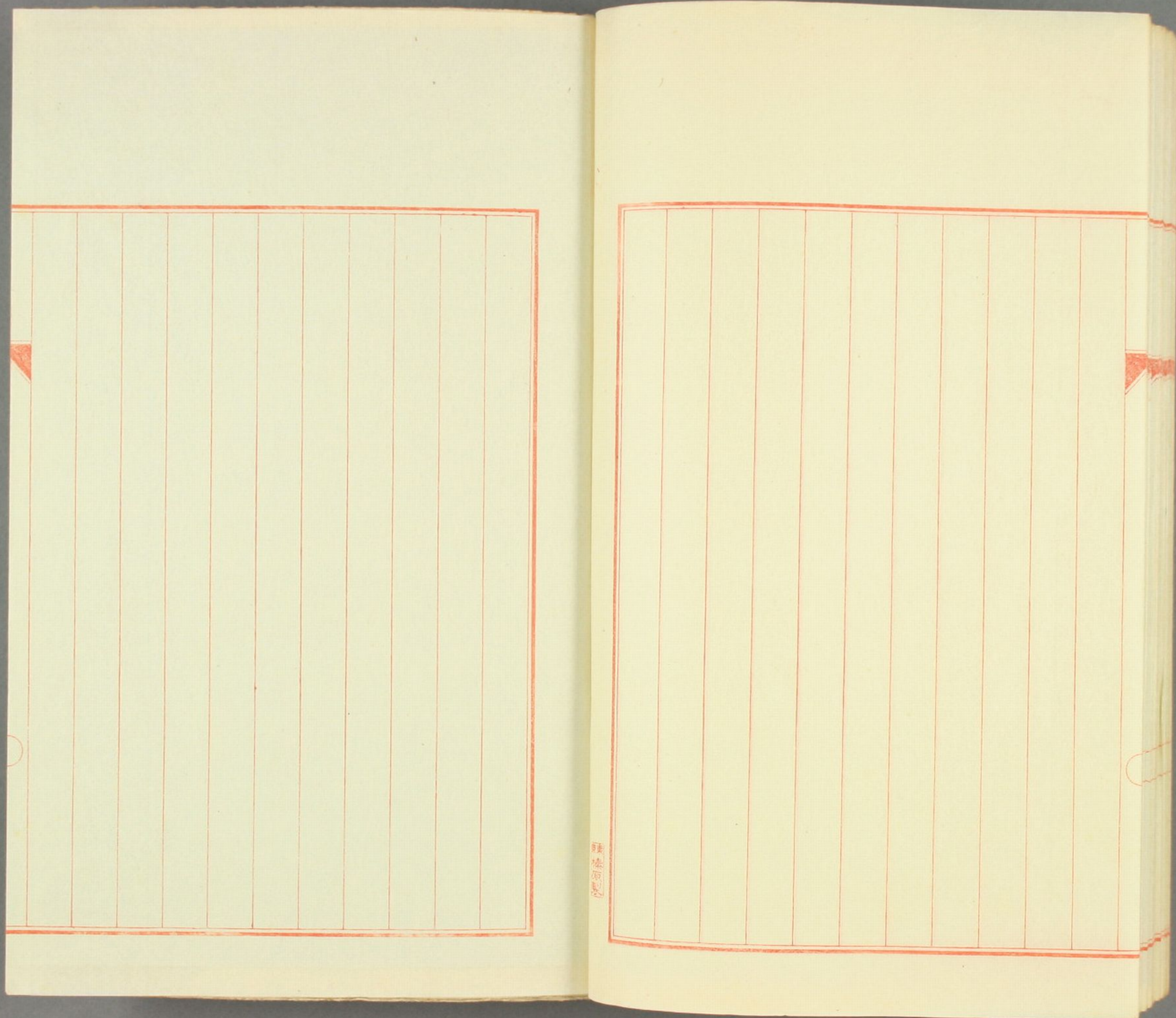
又同く物備う支那もさうく通うと紙貨
うきかしまふたむも四千五百以上あ
る大もさうく川路もあらわあるま
い年引路にふたむに千一萬のふた
ある

の奥難と通うとさうく川路もあらわあるま
い年引路にふたむに千一萬のふた
ある

○物集うきかしまふたむも四千五百以上あ
る大もさうく川路もあらわあるま
い年引路にふたむに千一萬のふた
ある



陳德厚製



即覽

鍾煥石製

明治三十七年

十月上浣

壬戌閏人